

小児看護学における動画撮影フィードバックを用いた 技術演習の試み

徳島佐由美¹⁾、安井渚¹⁾、樋口優子¹⁾

¹⁾ 森ノ宮医療大学 保健医療学部 看護学科

要 旨

【目的】小児一次救命処置（Pediatric Basic Life Support 以下、PBLs）技術演習時に学生の演習を動画で撮影し、スクリーンに映しながら教員のフィードバックを組み込んだ試みについて報告する。

【方法】対象者は、A大学看護学生3年生91名のうち演習日に出席した89名とした。演習方法は、5名を1グループとして各グループ1名の撮影対象者を選出した。

調査内容と方法は、演習を受講する前に、質問紙を配布した。質問項目は「演習内容の習得度」、「今後も動画撮影を取り入れた演習を希望するか」など10項目で4段階のリッカートスケールで回答を依頼した。また自由に感想を記述することとした。演習終了後1週間の留め置き法で回収し、分析は、Microsoft Excel 2019にて単純集計を行った。

所属機関の倫理審査部会の承認を得た（2019-036）。学生には、研究の目的および協力は自由意志であり、参加を拒否しても成績等への不利益はないことを文書と口頭で説明した。

【結果】89名に配布し、42名から回答があった（回収率53.2%）。「演習内容の習得度」に対しては、非常に習得できたと考える50%、習得できたと考える50%であった。「今後の演習も動画で振り返りを希望するか」に対しては、非常にそう思う17%、そう思40%、そう思わない29%、全く思わない14%であった。演習に対する満足度は平均7.9（SD1.0）点であった。

演習に関する自由記載では、「動画撮影で自分の技術を客観的に見る機会となり良かった」、「撮影されることで普段よりも集中できた」、「撮影の工夫をして欲しかった」等であった。

【考察】緊急時対応が求められる小児BLSの演習に動画撮影を取り入れた。その結果、学生は全員が技術を習得できたと捉えていた。これはBLSという緊急時の状況設定と小児の胸部がどの程度凹んでいるかなどを客観的に自己の技術を観察することができたためだと考える。しかし撮影される緊張と全体のスクリーンに映し出されることに抵抗感がある学生の要望もあり、希望者のみを対象とする等の課題が残された。今後は、学生の技術演習を臨床の看護師からフィードバックが得られるような、情報通信技術（Information and Communication Technology：ICT）を活用した学内演習を検討していきたい。

キーワード：小児一次救命処置、動画撮影、フィードバック、小児看護学

連絡先：徳島 佐由美 TOKUSHIMA Sayumi

〒559-8611 大阪市住之江区南港北1-26-16

森ノ宮医療大学 保健医療学部 看護学科

I. はじめに

近年の看護系大学の急増に伴い、教育水準の維持・向上が課題と明示されている¹⁾。その反面、看護学生が臨地実習で経験できる看護技術は年々減少傾向にあり、効果的な技術習得のための学内演習は重要である。そのため技術演習を始めとする教育内容や方法の工夫と強化が必要と述べられている²⁾。また看護学教育モデル・コア・カリキュラムでの「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標では、子どもに特有な看護技術を理解し、対象者に適した方法で実践することについて説明できる¹⁾ことが求められている。「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」では、実践能力を育成するためには講義と実習は実践と思考を連動させながら学ぶことが効果的で、技術演習での思考を実習場面へとつなぎ、実習での実践を内省することが重要とされる²⁾。さらに「大学における看護系人材育成の在り方に関する検討報告書」³⁾においては、地域包括ケアの時代の流れを中心とした看護教育の検討がなされており、今後の展望のひとつとして、小児と母性看護学を統合していく主旨の意見があった。

これらから小児と母性看護学においては地域で生活する母と子を守る看護師の育成を目指した技術演習を模索する必要があると考えた。小児看護技術教育では、状況設定や学生のイメージ促進を重要視されており、学生にとって小児という対象の理解をどのように促すことができるかが長く課題とされている⁴⁾。しかし昨今の少子高齢化に伴い、普段から小児と触れ合う機会の少ない学生はイメージ化が困難であり、また学内の技術演習に実際の小児を対象とすることは不可能である。

これまで本学の小児看護学においても、学生が看護学実習で実施する可能性の高い技術項目を学内演習として設定している。我々はこれまで市販化されている視覚教材を取り入れ看護過程や技術演習を行ってきた。しかし臨場感が生まれにくく演習に対する満足度が低い現状があった。そのため学生が意欲的に演習に参加することを目的とし、独自のシナリオを作成し、教員が出演する動画教材を用いるなどの取り組みを行った。これは学生が臨床実習場面で経験しやすい日常生活の援助の学内演習を教材として取り上げ実施した。学生の反応としては、市販の動画ではなく、学科教員が出演し、身近な演習室で関心は大きい様子があった。自大学で教員の自作による視覚教材を取り入れ学生の反応を調査した報告によると、教員が作成した動画に対して学生の関心は高まるとの報告⁵⁾があった。これらから昨今の学生の特徴をとらえた学内演習改善が必要であると考えた。

小児一次救命処置 (Pediatric Basic Life Support, 以下、PBLs) は、経験のある看護師であっても咄嗟の判断が求められ、非常に緊張感が伴う難易度の高い看護技術である。また地域で生活する母と子を守る看護技術である。大学で学ぶ学生は成人学習者であり、学習者自身が主体的に参画し、相互作用と即時的なフィードバックが得られることが学習効果を高めるために重要と考えた。先行研究によると昨今のスマートフォンが普及した時代の学生には、動画撮影が身近な現象となっており、小児看護学の学内演習にも効果があるとされていた⁶⁾。

そこで今回はPBLs演習の目標である《乳児の心肺蘇生の習得を目指すことができる》を学生が主体的に学修できることを目指し、技術演習時に学生の演習を動画で撮影し、スクリーンに映しながら教員のフィードバックを組み込んだ試みについて報告する。この報告により、看護学演習の新たな教育手法の示唆を得ることができる。

II. 研究目的

PBLs技術演習時に学生の演習を動画で撮影し、スクリーンに映しながら教員のフィードバックを組み込んだ試みについて報告する。

III. 研究方法

- 1) 対象者：「小児看護学援助論Ⅱ」を履修中の A 大学看護学生 3 年生 91 名のうち演習日に出席した 89 名である。
- 2) 事前課題：本演習の直前に PBLs について講義を行った。講義後に PBLs アルゴリズム、小児の胸骨圧迫と人工呼吸、小児の応急処置（異物除去）について事前レポートを課した上で本演習を行った。
- 3) 使用物品と教室設営：モデル人形は、乳児一次救命処置人形で、胸骨圧迫、人工呼吸、異物除去ができる、ベビーアン[®]を 12 体、フェイスシールド、バスタオル、ストップウォッチを使用した。また、動画撮影には、ipad3 台とスマートフォン 2 台を使用した。

演習場所は、一学年が収容できる大講義室にて行った。

- 4) 演習方法：演習前の講義で、演習内容について学生に説明を行った。各 2 グループを担当教員 5 名と 4 年生 4 名で担当し、合計 18 グループに分かれて実施した。

演習方法は、5 名を 1 グループとして各グループ 1 名の撮影対象者を選出した。撮影には、ipad とスマートフォンを使用し、教員が撮影を行った。技術演習は学生全員が実施したが、各グループで学生同士が話し合いの基で撮影対象者を選出した。撮影対象者のみを教員が巡回し、講義内で全てのグループの動画をフィードバックするため撮影時間を 1 分間の設定とした。撮影部位は、18 グループ全て同じ胸骨圧迫中のモデル人形の圧迫部位と実演中の学生の姿勢とした。

動画を再生した際に教員は、胸骨圧迫のリズムとモデル人形の胸の凹む深さ、学生の立ち位置についてフィードバックを行った。

演習のタイムテーブルを表 1 に示す。学生 1 人の演習時間は 5 分とし、各グループ 1 人の撮影対象者の撮影時間は 1 分とした。演習開始から 15 分間は、教員からの説明とデモンストレーションとした。心肺蘇生 30 分、動画撮影のフィードバックには 25 分、乳児の気道異物除去の説明と演習に 15 分、学生からの感想を 5 分程度の配分とした（表 1）。

表 1 【演習タイムテーブル】

時間	演習内容	学生の動き
15 分	・演習の流れ説明 ・教員によるデモンストレーション	・1 グループは 4～5 人で構成 ・グループ毎に席に座る
30 分	<各グループに分かれて演習> ・乳児の心肺蘇生 (各グループにベビーアン 1 体用意)	・1 人 5 分実施(5 分×4～5 人) ・あらかじめ決めておいた撮影対象者(各グループで 1 名)を 1 分間撮影
25 分	・リフレクション:動画で振り返る	・プロジェクターに映し出された動画を全員で視聴する ・良かった点、改善点について話し合う
10 分	<各グループに分かれて演習> ・乳児の気道異物除去(背部叩打法)	・1 人 1～2 分実施(1 分×4～5 人)
5 分	まとめ	学生からの感想 教員からの講評

5) 調査内容与方法：質問項目は研究者間で協議を重ね、作成した。自由記述の1項目を含めた全項目11項目で構成した調査票を作成した。質問内容は、以下の通りである。

「Q1：演習に積極的に参加できた」、「Q2：演習に責任を持って参加できた」、「Q3：演習には予習をして参加できた」、「Q4：これまでの演習より真剣に取り組むことができた」、「Q5：演習内容を習得できた」、「Q6：演習ではグループで協力して実践できた」、「Q7：演習は面白かった」、「Q8：演習は難しかった」、「Q9：今後の演習も動画撮影をして振り返りたい」、「Q10：10点満点で評価」とした。なお、Q1から9までは、「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「全く思わない」の4段階のリッカートスケールで回答を依頼した。Q10に対しては10点満点で演習の評価を点数で記入するよう求めた。また自由記述項目は、自由に感想を記述することとした。

演習を受講する前に、質問紙を配布した。演習終了後1週間の留め置き法で回収した。

6) 分析方法：データはMicrosoft Excel 2019にて単純集計を行い、学生の自由記載については、個々の記述全体を文脈単位とし、1内容を1項目とし、記録単位に分割した。その後、記録単位の意味特性を読み取りコード化、同類性に従ってカテゴリーに分類した。意味内容を忠実に示すカテゴリーネームをつけた。分析においては、3名の研究者間で分析結果が一致するまで何度も繰り返し検討することで真実性を確保した。

7) 倫理的配慮：所属機関の倫理審査部会の承認を得た(2019-036)。対象者には、研究の目的および協力は自由意志であり、参加を拒否しても成績等への不利益はないこと。個人が特定できない方法で撮影と分析を行うこと、撮影した動画は本演習と研究以外には使用しない、演習終了時には、動画データと質問紙を削除することを文書と口頭で説明した。また結果は、学会および論文で公表することを説明した。

利益相反に関する開示事項は存在しない。

IV. 結果

演習に参加したA大学看護学生89名に調査票を配布し、42名より回答があった(回収率47.2%)。学生からの記述統計の結果は図1に示す。

1) 演習への態度・取り組み

「演習への積極的に参加できた」について、非常にそう思う21名(50%)、そう思う21名(50%)であった。

「演習に責任を持って参加できた」について、そう思う25名(59.5%)、非常にそう思う14名(33.3%)、そう思わない3名(7.2%)であった。9割以上の学生が責任感をもって参加できていた。

「これまでの演習より真剣に取り組むことができた」について、そう思う22名(52.4%)、非常にそう思う11名(26.2%)、そう思わない9名(21.4%)であった。約8割の学生が真剣に取り組んでいたのに対し、2割の学生が「そう思わない」と回答し、その2割の学生の自由記述には、「動画が本人のみ見られたら動画の振り返りをしたいと思いました」という意見があった。

2) 演習前の学習

「演習には予習をして参加できた」について、そう思う19名(45.2%)、非常にそう思う11名(26.2%)、そう思わない11名(26.2%)、全く思わない1名(2.4%)であった。

3) グループ間の協力

「演習ではグループで協力できた」について、非常にそう思う27名(64.3%)、そう思う14名(33.3%)、そう思わない1名(2.4%)であった。98%の学生が協力して演習できたと回答した。

4) 技術の習得度・演習の難易度

「演習内容を習得できたか」について、非常にそう思う 21 名 (50%)、そう思う 21 名 (50%) であった。今回の技術演習方法により、回答した学生の 100% が技術習得できたと感じていた。

「演習は難しかった」については、そう思う 22 名 (52.4%)、そう思わない 10 名 (23.8%)、非常にそう思う 6 名 (14.3%) であった。約 15% の学生が、演習を非常に難しいと感じていた。

「演習は面白かった」について、非常にそう思う 24 名 (47.1%)、そう思う 16 名 (38.1%)、そう思わない 2 名 (4.8%) であった。「そう思わない」と回答した学生の自由記載は、「動画撮影は特定の人物を多くの人の目に触れることになる」であった。

6) 動画によるフィードバック演習の学生の評価

「今後の演習も動画撮影をして振り返りを行いたい」について、非常にそう思う 7 名 (16.7%)、そう思う 17 名 (40.5%)、そう思わない 12 名 (28.6%)、全く思わない 6 名 (14.3%) であった。

演習に対する満足度は 10 点満点で、平均 7.9 (SD1.0) 点であった。

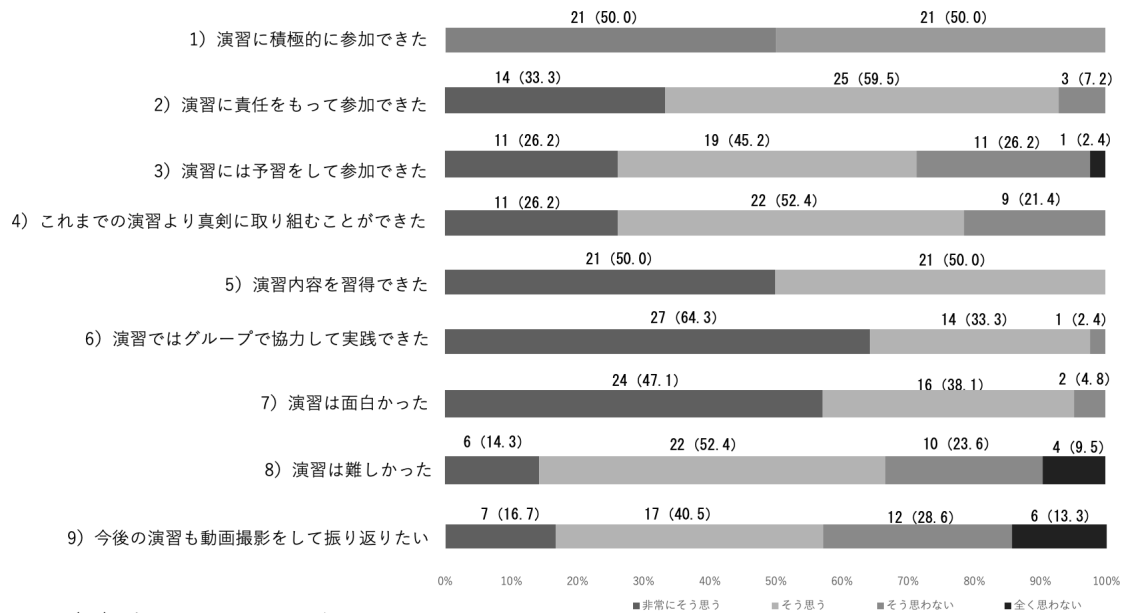


図1 動画フィードバック演習に対する学生の評価

7) 学生からの動画撮影フィードバックに対する自由記述

学生からの自由記述の内容を各文脈の意味内容を読み取りコード化を行い、質的記述的に分析を行った。その結果、記録は 18 単位、24 コードからなる【動画撮影に対する肯定的意見と学び】と【動画撮影に対する要望】の 2 カテゴリーを抽出した (表 2)。

【動画撮影に対する肯定的意見と学び】は、本演習に対する学生の肯定的意見と学びを示す。「自分でできていると思っていても、違う視点からみるとできていない部分がよくわかった動画の振り返りはよいと感じた」、「撮影されるということで普段よりも集中してできる人がいた」などの 17 コードから生成した。

【動画撮影に対する要望】は、本演習に対する学生の要望を示す。「動画が本人のみ見られたら動画の振り返りをしたい」、「撮影されることが嫌である人が多かった」などの 7 コードから生成した。

表2 動画撮影フィードバック演習に対する学生からの意見、感想

動画撮影の肯定的意見と学び	自分でできていると思ってい、違う視点からみるとできていない部分がよくわかった動画の振り返りはよいと感じた 動画の振り返りはよいと感じた 動画撮影は、胸骨圧迫は押しているつもりでも押せていないということがわかったのでとても良い 撮影されるということで普段よりも集中してできる人がいた 根拠を理解して、実施できていなかったのが救急蘇生は緊急性があるものなので、いざというときに実施できるように練習したいと思った 一番かたくて折れにくい場所が圧迫を行う場所であるという根拠を学んだ 実際に人形を用いて演習をしたこと 成人のとは違うということを忘れずいざというときに行動し、乳児を助けられるようになりたい 乳児の心肺蘇生は、指が痛くなったので多くの人を呼ぶことが必要だと学んだ 胸骨圧迫から人工呼吸するときの時間を早くしないといけない 母親の存在も忘れてはいけない 母親が安心できるように援助者も落ち着いた姿勢で行う 一人で3分間乳児の心肺蘇生を続けるのは指が痛くなった、疲れたりするので複数人呼び交代しながら行うことで継続できると思った 小児ということもあって、体も小さくて胸骨圧迫するときもおそろおそろで少し怖かった 命を救うためにとても大切なことだと感じた 胸骨圧迫で指が痛かった 今回の心肺蘇生法が一番印象に残った	
	動画撮影要望に対する	動画が本人のみ見られたら動画の振り返りをしたい 撮影されることが嫌である人が多かった 動画撮影をしてみんなで振り返るのであれば、顔をなるべく映さないよう撮影してほしい 1/3程度まで圧迫できているのか、空気を送り込んでいるのかを確認できるような撮り方を工夫してほしい 振り返りの際はもっとアドバイスがほしい 動画撮影は特定の人物を多くの人に触れることになる 動画自体は自分の振り返りができて良いが、活用が授業でできていない

V. 考察

これまで、本学科の小児看護学で同演習において、乳児の胸骨圧迫を確実に習得できることを目的とした演習を実施し、教員から客観的な技術指導を行っていた。今回は学生本人が自身の技術を客観的に振り返ることを目的に、緊急時対応が求められる PBL の演習に動画撮影を取り入れた。その結果、学生は全員が技術を習得できたと捉えていた。これは PBL という緊急時の状況設定と小児の胸部がどの程度凹んでいるかなどを客観的に自己の技術を観察することができたためだと考える。また動画を活用することにより、すべての学生が積極的に参加できたと感じていた。7割以上の学生は演習前に予習を行っていた。これは、大学生 4,948 名を対象に調査した報告⁷⁾によると「授業の予習をする」大学生は、全体の 35.4%であった。これに比較して、本演習の事前予習した学生の割合は高い。これは今回の動画撮影フィードバックを用いた演習が学生の予習に影響しているのではないかと考える。

自由記述の結果からは、【動画撮影に対する肯定的意見と学び】と【動画撮影に対する要望】を抽出した。【動画撮影に対する肯定的意見と学び】において「成人のとは違うということを忘れずに行動し、乳児を助けられるようになりたい」、「母親が安心できるように援助者も落ち着いた姿勢で行う」が得られており、これは本演習の目的である、《乳児の心肺蘇生の習得を目指すことができる》の到達を示している。これらから動画撮影フィードバック演習による効果は大きいと考える。これら自由記述のコメントは、学生が主体的に学び、自己の成長を感じることができたのではないかと考える。看護系大学生の学習活動の質と看護実践の基盤となる力の関連性を明らかにした先行研究によると、学内演習において小児看護学演習後に正の相関がみられていた⁸⁾。これは学内演習における質の高さが看護実践の基盤となる力の育成に寄与することを意味する。本演習において学生に習得してほしい項目を、絞り込み限定して設定した。看護大学教育の学内演習で実際に演習できる人数と時間の制約によって、習得できる技術に学生間の差を生じさせず、看護学生として習得を目指す点に現局したためである。この点に関しては、学部3年生が目指す小児看護技術を達成できたと考える。また演習に対する満足度は10点満点で7.9点であり、高い評価を得ていると言える。これらは先行研究の結果からも看護実践の基盤となる

力の育成に繋がったと考える。

しかし、「今後の演習も動画撮影をして振り返りを行いたい」かの設問には、再度動画撮影フィードバックによる演習を希望した学生は半数であった。その理由として【動画撮影に対する要望】にある、「1/3程度まで圧迫ができているのか、空気を送り込めているのか確認できるような撮り方を工夫してほしい」に代表されるように、撮影部位の固定の必要があったと考える。今回は、各グループで撮影者と演習者を決定し、適宜教員が巡回し撮影を行った。事前に撮影部位を教員間で共有していたが、撮影対象者の位置とモデル人形の体の向きの設定は行っていなかった。そのため学生の撮影対象者の判断によって、撮影の方向が異なり、いくつかのグループの動画には、撮影対象者の顔が映ってしまった。また撮影される緊張と、全体のスクリーンに映し出されることに抵抗感があり撮影を希望しない学生がいることから、希望者のみを対象とする等の課題が残された。これらの学生からの要望を真摯に受け止め、次回は指導教員の増員と、成人の一次救命処置との大きな違いである胸骨圧迫時の胸の深さに焦点化した撮影部位の固定を行う必要がある。

今後の教育の示唆

本研究では、PBLS 技術演習時に学生の実技演習の動画を撮影し、スクリーンで映して教員からのフィードバックを行った。その結果全員が技術を習得できたと捉えていた。しかし撮影を希望しない学生も多く、希望者のみの撮影とする。また撮影部位の設定を入念に行い、撮影対象者の個人が特定できないように撮影の工夫の改善が必要である。

厚労省は、看護学生の看護実践能力の向上を図るための教育体制として、臨床現場で看護を実践している看護職員の活用を推進している⁹⁾。コロナ禍にある看護学演習において、学生の技術を動画撮影し、臨床の看護師からフィードバックが得られるような演習が、看護学生の動機づけに有効ではないかと推測する。これらをふまえ今後は、学内技術演習において、臨床で勤務する小児看護専門看護師との協働し、実際のPBLS 場面をイメージできるようなシナリオを作成し、情報通信技術（Information and Communication Technology：ICT）の活用を取り入れ、より高い演習効果が期待できるように検討していきたい。

VI. 結論

緊急時対応が求められるPBLSの演習に動画撮影を取り入れた。その結果、学生は全員が技術を習得できたと捉えていた。これはBLSという緊急時の状況設定と小児の胸部がどの程度凹んでいるかななどを客観的に自己の技術を観察することができたためだと考える。しかし撮影される緊張と全体のスクリーンに映し出されることに抵抗感がある学生の要望もあり、希望者のみを対象とする等の課題が残された。今後は、学生の技術演習を臨床の看護師からフィードバックが得られるような、ICTを活用した学内演習を検討していきたい。

謝辞

本研究に参加してくださいました学生の皆様に感謝申し上げます。

付記

なお本研究は、第46回日本看護研究学術集会で発表した。

文献

- 1) 文部科学省. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～. 2017. 2019年2月19日アクセス, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm
- 2) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 2011. 2019年2月19日アクセス, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y-att/2r985200000131bh.Pdf>
- 3) 文部科学省. 大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会. 2019. 2020年10月1日アクセス, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gjjiroku/1417961.htm
- 4) 長谷川由香, 齋藤啓子. 小児看護学実習におけるケア経験向上を目指した学内演習・実習指導の効果. 日本看護学教育学会誌. 2016: 26 (1): 89-96.
- 5) 菅原 隆成, 渡部 真奈美. 小児看護学演習における自作の視聴覚教材(動画)を用いた効果に関する検討 リアクションペーパーの記述内容から. 朝日大学保健医療学部看護学科紀要. 2020: 6.52-55.
- 6) 藤田優一. 成長する瞬間を逃さない! 学生・実習生の"気づき"を促す教育支援【看護場면을教材化し、良質な経験知とするための講義・言葉・かかわり】スマートフォンを活用した"気づき"を促す技術演習. 看護人材育成. 2018: 15 (3): 456-459.
- 7) ベネッセ教育総合研究所. 第3回大学生の学習・生活実態調査報告書 ダイジェスト版 2018. 2021年2月8日アクセス, https://berd.benesse.jp/up_images/research/3_daigaku-gakushu-seikatsu_04.pdf
- 8) 田中岳美, 鎌田佳奈美, 池田友美. 看護系大学生における学習活動の質と看護実践の基盤となる力の関係性—小児看護学演習において—. 日本小児看護学会誌. 2019: 28: 42-50.
- 9) 厚生労働省. 今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書. 2010: <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0217-7b.pdf>

Technical Exercises Attempts in Pediatric Basic Life Support Nursing Using Video Recording Feedback

Sayumi Tokushima¹⁾, Nagisa Yasui¹⁾, Yuko Higuchi¹⁾

¹⁾Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Morinomiya University of Medical Sciences

Abstract

Purpose : During the pediatric basic life support (PBLS) technical exercise, the student's practice was filmed and projected on the screen to give feedback from the teacher. We will examine to report on the attempts this technical exercise.

Method : We Target: 89 out of 91 third-year nursing students at University A who attended the exercise day. Survey content and method: Questionnaire was distributed before taking the exercise. We asked for answers on a 4-step Likert scale with 10 questions, such as "the degree of mastery of the exercise content" and "do you want to continue the exercise incorporating video recording?" In addition, I decided to freely describe my impressions.

Analysis method: The data was simply aggregated using Microsoft Excel 2019. Ethical considerations: Obtained approval from the ethical review committee of the institution (2019-036).

Result : It was distributed to 89 people, and 42 people responded (recovery rate 47.2%). Regarding the "acquisition level of the exercise content", 50% thought that they could master it very much, and 50% thought that they could master it. When asked "Do you want to look back on future exercises with videos?", 17% agree very much, 40% agree, 29% disagree, and 14% disagree at all. Satisfaction with the exercise averaged 7.9 (SD1.0) points. In the free description about the exercise, "I'm glad that it was an opportunity to objectively see my technique by shooting a video", "I was able to concentrate more than usual by shooting", "I wanted you to devise shooting" etc. there were.

Conclusion : Video recording was incorporated into PBLS exercises that require emergency response.

The result was a tense exercise, and all the students perceived that they were able to master the technique.

Key words: Pediatric Basic Life Support , video recording, feedback , Pediatric nursing

